

オピニオン & フォーラム

音のない世界に生きて

インタビュー

聞こえる世界と壁
出会いがあれば
違う文化に気づく

手話を言語のひとつと認める「手話言語法」の制定を求める機運が高まっている。昨年までの3年間に、すべての地方議会で意見書が採択された。3年後には東京でパラリンピックも開かれる。子どもに手話で国語を教えてきたろう者の早瀬憲太郎さんに、手話通訳を介して、聞こえる世界と聞こえない世界について聞いた。

——昨年のリオ・パラリンピックで、NHKのキャスターを務められたのですね。

「東京のスタジオで9日間出演しました。気づかされたのは、いかに他の障害のことを知らなかつたかということ。僕にとっては、車いすの人も目の見えない人も『聞こえる世界』の人ですから」

「一方で、だからこそ、障害と

いんじやない。これまで聞こえない人に会えなかつただけ。今日出会えてよかつた」と伝えました」

「数年後、僕が監督をした映画の上映会で、手話の堪能な若者が『覚えてますか』と話しかけてきました。あの店員でした。福祉施設の職員として働いていると書いていました。こういう出会いと気づきが社会にもつと必要です」

粹なスポーツとして伝えられたのでは、とも思います。初めて目が不自由な人たちのゴールボールという競技を知りました。鈴の入ったボールを投げ合い、ゴールを奪う競技です。聞こえる人たちにろう者のことを知つてもらうには、僕も違う障害の人たちの世界を知らなくてはと強く感じました」

——3年後は東京です。日本の

「僕は生まれながら耳が聞こえません。父母と妹の4人家族の中では僕だけがろうです。故郷の奈良でろう学校に通い、地元の公立の小・中学校では難聴学級で耳の聞こえない仲間とともに学びました。その後、中学から始めた柔道

■ ■ ■

「最近はスマホなど情報ツールも普及し、電車の中に電光掲示があるようにハード面は整いつつあります。でも、人の心つまりソフト面はまだまだです。例えば、空港での搭乗手続きで、僕が『耳が聞こえないから筆談を』と紙に書くと、航空会社の人は隣にいる妻に話しかけ、僕とコミュニケーションをとろうとしません。妻もうう者なのですが。差別する気持ちはないのでしょうか、聞こえない人と一緒にいるのは、聞こえる介護者だと無意識に思っているかも知れません。そうした意識を変えるのは時間がかかるでしょう」

「僕が家族とけんかをするときは、目を見てします。でも、同級生はよそを見てけんかする。けんかがいつ始まつていつ終わつたのか、僕にはわからない。それを知つて驚きました」

「聴者の彼女ができて、デートでお化け屋敷に行きました。手をつないでドキドキ、わくわくして。でも、彼女と僕は怖いタイミングが全然違つた。彼女は何かの音を聞いて、『キャー』と怖がる。僕は目で見ないとわからないから、むしろ怖がる彼女の顔を見

「『聴者』と『ろう者』が接する機会のないことが問題です。焼き肉屋に行つたときのことです。若い男性店員に身ぶりでメニューを頼むと、点字メニューを持つてきました。怒るというよりもつくりです。点字は目が見えない人のためのもの、と伝えた後突然泣き出しました。食事の後、彼が手紙を持ってきた。「見えない人との区別ができなかつた自分に悔しくて泣いた」と。僕は『君が悪

るお化けは全然怖くなかった。その後、ろうの友人と同じお化け屋敷に行つたら、怖がるタイミングが同じでした。お化けを見て同時に怖がった。聞いて感じる恐怖と見て感じる恐怖。聞こえる人との違いはこれなんだと思いました』

「それで文化祭でお化け屋敷を企画しました。聞こえる人も聞こえない人も同時に怖がるようになります。音のないお化け屋敷です。そのとき初めて、通常

ろうの子どもたちに手話で教えるろう者

やせ けんたろう さん

1973生まれ。学習塾「早瀬道場」塾長。NHK「みんなの手話」講師8年、映画「ゆずり葉」（2009年）の監督も務めた。

は音楽がかかっていたことも知りました。僕たちのお化け屋敷は聞こえる人にも新鮮で、かえつて怖かったらしいですよ」

手話は第1言語

当たり前を実現

ます。なぜそんなに何事にも
的なのですか。

られる意味は大きい。これまで
第1言語を身につけられないま
で、日本語の「人間の世界」に

うが当たり前のことか当たり前ではない世界がある。僕にとって音のない世界が当たり前ですが、そうでない世界もある。理解しなければと思うより、まず知らう、気づこうという気持ち、そして何よりも想像力が大切です。出会いがあって初めて、互いに新たな世界、違う文化があることに気づく。それは、自分を見つめ、価値観を見直すこともあります」

——映画監督や手話講座の講師、いまは競技自転車にも挑戦しています。なぜそんなに何事にも積極的なのですか。

「親子関係が僕を作ったと思います。親が障害に対して前向きであれば、子どもも前向きになり自己肯定感をもてる。還暦祝いに母にカメラを贈ったら、母は写真にはまり、あるコンテストで2位になりました。受賞あいさつでこう言ったんです。『音のない世界に生きる息子の感性を大事にして学んだことと、自分の感性も育った』

第1言語を身につけられないまま、日本語の文化や言葉の世界に入らなければならぬいろいろ者が少なくなかったですから。日本には中途も含め聴覚障害者は約30万人いますが、手話を使えるのは数万人です。ろう者が生まれたときから手話を学び、それから日本語を覚える。ようやくそれが当たり前になるところまで近づいてきた。だれもが平等に言語を学び、文化

たと思っていますが母も醫院
ない僕を産んでよかったですと思つて
くれていることが本当にうれしか
つござります

――大学卒業後、ろうの子どもたちの学習塾を立ち上げました。 「主に国語を教えています。聞こえる人は生まれたときから、意

話でございましたV6の三宅健さんは『手話との出会いは人生を広げた』と言います。そういう意味で、手話言語法の制定は、聞こえる人にとっても手話と出会う、新しい文化と出会うチャンスです

——いろんな人たちが共生する社会にするためには何が必要でしょうか。

「東日本大震災で障害者の死亡率は健常者の2倍といいます。宮城県では肢体不自由者の次にろう

「ろう者にとつては100%認識できる言語は目で見る手話。第1言語が手話で、日本語は第2言語と言えます。でも、ろう学校でも手話は日本語習得の妨げになると非余さへと歴史があります」

言語条例が制定され、すべての地方議会で手話言語法の制定を求める意見書が採択されています。

る△手話で学ぶ△手話を学ぶ△手話を使う△手話を守る、という権利を保障するというものです」
「もうとして社会の中で生きることを認められつつあると感じます。やっとスタートラインに立つ

「高校に入つて、ろうとは何者か、手話とは何かに目覚め、考えるようになりまし

話とは何かに目當
ようになりまし

「いまの社会で僕は『障害者』という視線を向けられています。障害者を『かわいそう』『理解してあげる』という見方ではなく、異なる文化をもつ一人の人間として、個として向き合う。互いに学び合い、どちらも助ける側にも助けられる側にもなる。そうなれば、障害があるとかないとかはどうでもいいことになります。『お互い様』になることが、共生社会の実現に近づく道だと思います」

